

# 新しいラグビー

(第 93 回全国高等学校ラグビーフットボール大会 所感)

2014/1/7 に近鉄花園ラグビー場で行われた全国高校ラグビー決勝は東海大学付属仰星高等学校の優勝となりました。元気一杯戦った諸君らの健闘を讃えたいと思います。昔々選手として戦った時のこと<sup>(\*)</sup>、監督として全国優勝した時のこと<sup>(\*)</sup>をなつかしく思い出されます。

大会開催中の新聞記事を拾い三つのキーワードを上げたいと思います。題名は「新しいラグビー」です。「新しい年」の始めに「新しいラグビー」の話が出来ることは嬉しいことです。

## その一、「脱 3K ラグビー」<sup>(\*)</sup>

ラグビーという素晴らしいスポーツを脱 3K ラグビーという言い方をしなければならないのは残念なことです。桂高校の杉本監督の言葉「うちのような学校が花園を楽しむことで、ラグビーを始める生徒が増えてほしい」はラグビー界の現状を語ると共にラグビーを愛する心が滲み出ていると思います。1951年に天王寺高校が優勝した時は15人のプレーヤー以外数人のリザーブで1シーズン戦い通しました。全国屈指の進学校の浦和高校の柴田キャプテンは「体は小さくても、相手や球への寄せが速く、互いを生かすラグビーを見せたい」とスピードと敏捷性を生かすラグビーを目指しています。身体の大きさや力の強さだけで勝負するのではなく、記事の言葉通り文武両道のスタイルは後に続く学校のモデルケースとして期待されているのです。

2019年に日本で開催されるラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピックもラグビーの愛好者の底辺の広がりがなければその場限りの空しいお祭りに終わってしまうでしょう。それは残念なことです。

## その二、「立ってボールをつなげた」<sup>(\*)</sup>

東海大仰星・北林選手が語ったコメントです。更に野中キャプテンは「まだ倒れ込む部分も多い」とコメントしています。

これまで「ラグビーは立ってするものだ」と言い続けてきましたが、全く耳を傾けてもらえませんでした。倒れ込んではいけないのにタックルと見れば飛び込んでいってボールの向こうに折り重なるようにすることを ruck と教えられているのでしょうか。Law は正確に読み、その意図を現実にしなければなりません。ruck の前に接点で勝つということは接点までの接近の仕方と点での体勢やパスを含めた接点でのボールの処理の問題であることも忘れてはなりません。

## その三、「脳内ラグビー」「ノーラックラグビー」<sup>(\*)</sup>

「目を見て読めた」結果のインターセプト。インターセプトは味方 BK ラインへのリスクもあります。しかし決行するという flair は素晴らしいものです。ラグビーは power と flair のスポーツです、ruck を作らずに選手が立ってプレーする『ノーラックラグビー』を目指すスタイルを貫いた東海大仰星に賛辞を送ります。

「脳内ラグビー」は古くは inside rugby と言いましたがラグビーの真髄に迫るものです。若い人たちに明るい芽が萌えていることは本当に嬉しい限りです。

最後に「新しいラグビー」のために以上3点をプレーヤーやコーチ一人一人が考え行動に移すことが求められます。ラグビーがもっと楽しくプレーできるようになることを望みます。

2014.01.18  
西川 義行

- \*1:筆者は 1947 年の 26 回大会において天王寺中のプレーヤーとして出場している。  
 \*2:筆者は 1951 年の 30 回大会において大学生監督とし天王寺高校を率いて決勝に進み秋田工を 8-0 で破り優勝した。  
 \*3: 2013 年 12 月 27 日・朝日新聞朝刊東京版より

ラグビー全国高校大会きょう開幕  
 新勢力花園に咲くか

「脱 3 K」追求 創部 60 年初 桂 「互い生かす」 54 年ぶり 浦和

27 日に開幕する第 93 回全国高校ラグビー大会（大阪・近鉄花園ラグビー場）に、新鮮な顔ぶれが出場する。創部 60 年の桂（京都）が初出場、浦和（埼玉）が 54 年ぶりの切符を手にした。今年度の花園は、51 代表のうち 34 チームが連続出場。毎年、出場校がほぼ変わらない中、「新しい力」は高校ラグビーに新たな流れを作れるか。

「脱 3K ラグビー」。桂は、定説を覆すスタイルで挑む。きつい、汚い、けがが多い、というマイナスなイメージが強い中、単純な走り込みはせず、出来るだけ体の接触を避けるプレーを追求する。選手の自主性を重んじて、競技を楽しむことを心がけている。

部員は 49 人。スポーツ推薦がない府立校で、高校入学まで未経験の選手も多い。グラウンドは野球部などと共用で、練習は一日 2 時間。限られた場所と時間で、速さで**ほんろう**する展開ラグビーを磨き、伏見工、京都成幸などの強豪がひしめく激戦区を勝ち抜いた。杉本修尋監督は「うちのような学校が花園を楽しむことで、ラグビーを始める生徒が増えてほしい」と願う。

高校ラグビーの活性化。それには、花園での新勢力の台頭が欠かせない。初出場は昨年度は 1、2 年前はゼロ、3 年前は 2。今年度は、桂、倉吉北（鳥取）、坂出第一（香川）の 3 チームが初出場で、4 大会ぶりの「快挙」だ。このほか、九州学院（熊本）が 23 年ぶり、目黒学院（東京）が 22 年ぶりに戻ってきた。

一方、秋田工が最多の 65 回目の出場。佐賀工の 32 年連続、大分舞鶴の 28 年連続、石見智翠館（島根）の 23 年連続など 10 チームが 10 年以上連続での出場だ。全国高校体育連盟ラグビー専門部の柴田淳部長はいう。「部員が集まる学校と、足りないところの実力差が出ている。野球やサッカーなどが部員数を保っているなかで、ラグビーは厳しい」

強豪校には自然と人が集まるが、多くが部員集めに苦勞する。全国高体連のラグビーの登録部員数は、最多だった 1991 年度の約 5 万 7 千人から、今年度は約 2 万 4 千人。単純計算では、1 都道府県の平均選手数は約 510 人。最多は東京の 1788 人で、最少は鳥取の 52 人になる。

浦和は、部員 72 人のほぼ全員が高校からラグビーを始めた。体育の授業でラグビーを取り入れるなど、競技熱は高い。それでも、部員集めは容易でない。上級生らが入学直後の 1 年生の教室を回って、熱心に勧誘する。柴田尚輝主将は「体は小さくても、相手や球への寄せが速く、互いを生かすラグビーを見せたい」。全国屈指の進学校で、練習後に教室に戻って勉強する選手も多い。文武両道のスタイルは、後に続く学校のモデルケースとして期待されている。（増田啓佑）

- \*4: 2014 年 1 月 4 日・朝日新聞朝刊大阪版より

東海大仰星

東海大仰星が、FW とバックス両方からの攻めで圧倒。立ち上がり 2 トライをとられたが、前半 18 分、モールから西田涼馬選手（3 年）が押し込んで左中間にトライ。その後もこまめに加点し、後半は北林佑介選手（3 年）が 2 トライを決めるなどした。「立ってポールをつなげた」と北林選手。野中翔平主将（3 年）は「まだ倒れ込む部分も多いが、次の試合には修正して臨みたい」と語った。

- \*5: 2014 年 1 月 8 日・朝日新聞朝刊東京版より

ハイライト

体格は互角。鍵となった FW 戦で、東海大仰星には「秘策」があった。

「いつもはダブル（2 人）だけど、きょうはトリプル（3 人）でいかせた」（湯浅監督）。キックオフ直後、突破を試みる桐蔭学園 FW に、3 人がかりで絡みつく。出だしの 1 歩が速く、球を簡単に前へ運ばせなかった。

激しい圧力が相手の判断を一瞬、遅らせた。

前半 1 分、敵陣 22 メートルライン付近中央で桐蔭学園が外へ展開しようとした場面。FW で押され、リズムをつかめずにいた相手 SO に、ロック西野が突進した。外か内か。「目を見て読めた」。内へ投げたパスをインターセプト。そのまま持ち込み先制トライとした。

後半も FW の足は止まらない。11 分、自陣 10 メートルライン付近で相手 SH にタックル。体勢が崩れてゴロになったパスを西野が奪い、約 50 メートル独走。ロック永井の決勝トライにつなげた。

ボールを使わない準備が強さの源でもある。毎試合前の宿舎でのシミュレーション。映像は使わず、声だけで試合を進め、イメージを全員で共有する。いわば「脳内ラグビー」だ。決勝前日は 4 時間に及んだ。SO 山田平は言う。「トリプルをやったのは初めて。でもあれで優位に立てた」

FW 戦で勝り、ラックを作らずに選手が立ってプレーする「ノーラックラグビー」。目指したスタイルを貫き、秘策もすぐに実行できる組織力の高さは、王者にふさわしかった。（増田啓佑）